『フッサール研究』第 16 号（2019）77–91

現代哲学としての現象学

鈴木　生郎
（鳥取大学）

１．はじめに

2017 年 8 月に新曜社から刊行された『ワードマップ現代現象学：経験から始める哲学入門』（以下『現代現象学』）は、現象学（あるいは哲学一般）の明快な入門書として、さらには、現象学を現代哲学の一分野として蘇らせる新たな試みとして、きわめて画期的な書物である。発売してすぐに複数の版を重ねている事実は、その価値が広く認められていることの証だと言えるだろう。

本稿はこの『現代現象学』を評価することを目的としている。ただし、私自身は現象学の専門家ではなく、現代の分析哲学（とりわけ現代形而上学）を専門とする研究者に過ぎないことはお断りしておかねばならない。しかし、にもかかわらず私が評者のひとりに選ばれた理由はおそらく二つある。ひとつは、私が同出版社から 2014 年に出版された『ワードマップ　現代形而上学：分析哲学が問う人・因果・存在の謎』（以下『現代形而上学』）の共著者のひとりであることであり、もうひとつは、私が哲学的問題解決を目指す分析哲学の研究者であることである。

では、私が『現代形而上学』の共著者であることから導かれる、私が果たすべき役割はどのようなものだろうか。『現代形而上学』は、現代形而上学という分野で論じられている議論を平易に解説することを目指した――『現代現象学』と多くの目的を共有する――入門書である。この点から私に期待されることは、入門書の執筆者という観点から『現代現象学』を評価することだろう。私は以下の第 2 節でこのことを試みるが、先に予告しておくならば、そこでの私の主眼は、『現代現象学』の美徳や特徴を明確化することによって、同書の読者の理解に資することである。

そして、私が分析哲学の研究者として果たすべき役割は次のことだろう。分析哲学は、すべてがそうだとは言えないにせよ、哲学的問題解決を主要な課題とする現代哲学の一分野である。そして『現代現象学』は、同様の目的をもつ現代哲学の一分野として現象学を復活させる試みにほかならない。すると、ライバルとしての分析哲学研究者には、こうした新たな試みを（批判的に）評価することが求められよう。本稿の第 3 節で、私はこうした課題に取り組む。ただし、もちろん本稿で扱うことができるのは同書の一部の内容に限られること、および、批判的に検討するとはいえ、全体としてはむしろ、新たなライバルたる現代現象学に対する理解を深めることや、その取り組みに対して建設的な疑問を提示することを目指していることは強調しておく。

なお、本稿で展開する議論の内容は、基本的には 2018 年 3 月 17 日に開催された第 16 回フッサール研究会のシンポジウム「現代現象学の批判的検討」において、筆者が行った発表内容を基本的には踏襲している。以下で主に行なうのは、そこで展開した私の主張を明確にすることである[1]。

２．入門書としての『現代現象学』

本節では、『現代現象学』が現代哲学の入門書としてもつ美点や特徴を明らかにすることを試みたい。私の考えでは、『現代現象学』について指摘されるべき重要な点は、(1)類書の少なさ、(2)多様な文献への関連付け、(3)文章の平易さと魅力の三点である。以下、それぞれについて説明していこう。

まずは、「類書の少なさ」である。この点を明らかにするためには、『現代形而上学』の執筆事情との対比が有用だろう。現代形而上学は、日本では（少なくとも『現代形而上学』出版時点では）比較的マイナーな分析哲学の一部ではあったが、世界的に見れば事情はかなり異なる。現代形而上学はすでに確立した分野であり、海外では定評ある入門書がすでに多数出版されている。そして『現代形而上学』は、これらすでにある蓄積を横目でにらみながら、標準的で中立的な紹介を目指す形で執筆されたものである。

しかし、『現代現象学』については事情が異なる。本書は、現代現象学という新たな分野を作り出そうとする試みであり、評価の確立した教科書がすでに存在する状況で書かれたものではない。もちろん個別には、現象学が蓄積してきた豊富な文献

1. 議論の明確化にあたっては、当日の提題者や参加者の方々との議論に多くを負っている。この場を借りて感謝したい。

――それがきわめて豊かであることは文献情報からも明らかである――を利用することができただろう。しかし、それでも新たな分野をかなりの部分独力で作り上げることになったはずであり、そのために要した共著者の努力が膨大なものであったことは想像に難くない。にもかかわらずこれほど明快で一貫した入門書を完成させたことは、まず称賛されるべき点だろう。

ただし、関連して、本書を読む上で注意すべき点があることも間違いない。本書は今述べたように、共著者たちが個々の知見を活かしつつ、新たな分野を立ち上げようと試みるものである。そのために内容的にも――とりわけ本書後半（４章～９章）は――個々の執筆者の研究に依存する面が大きく、また、執筆者同士にも完全には意見が一致していない点もあるように感じられる[2]。もちろん、こうしたばらつきは当然予想されることであり、むしろ現代現象学が今後多様な発展を遂げる可能性があることを示すものだろう。しかし他方で、こうした多様性があることは、本書の中でもう少し明確にされたほうがよかったのではないかと思われる[3]。

次に、『現代現象学』の「多様な文献への関連づけ」が徹底したものであることを指摘しておこう。入門書は執筆する際に重要な課題のひとつは、関連する文献情報を示すことで、書かれた内容を既存の研究ネットワークと有機的に結びつけることである。もちろん、文献参照をできるかぎり抑え、哲学的問題の核心のみを伝えようとするタイプの入門書の価値を否定するつもりはない。しかし、読者が興味をもった論点についてさらに踏み込んで考えたいとき、あるいはその内容を他の分野の議論と比較したいときに、豊富な文献情報がもつ有用性は計り知れない。そして『現代現象学』は、この点できわめて徹底している。特に、現象学に関する文献だけでなく、関連する分析哲学の文献への細かな目配りがなされていることは特筆すべきだろう[4]。

しかし、もしかするとここで、本書の文献情報が分析哲学に偏りすぎているのではないかと感じる読者もいるかもしれない。しかしこうした懸念は、『現代現象学』の出版時に、酒井泰斗氏のプロデュースによって開催されたブックフェア「今こそ事象そのものへ！」で配布されたブックリスト（現在は Web で閲覧可能[5]）によってほぼ払拭されたと言ってよい。このリストは執筆者を含む 15 名の選書者によって選ばれ

2. 目立つ例としては、第４章を読むと「検証主義的真理観」が現象学において標準的な理解であるかのように読めるが、その点に後で留保がつく（たとえば p. 148, n.18）ことが挙げられるだろう。

3. もちろん、執筆者間の差異についてまったく触れられていないわけではない（たとえば p. 294）。しかし、その差異がどこまで深いものなのかを読み取ることは難しい。

4. とはいえ『現代現象学』の執筆者がみな、専門家と言ってもよいほど分析哲学に精通していることはよく知られていることでもある。

5. http://socio-logic.jp/events/201708_phenomenology.php#list

た包括的なものであり、『現代現象学』をさらに豊かな研究文脈に位置づけることに成功している。こうした新しい試みは――大変な労力を要するものであることは間違いないが――今後入門書を執筆・出版することになる多くの研究者にとっても参考になるものだろう。

最後に、『現代現象学』の記述の平易さとその魅力について触れておこう。平易であり魅力的であることが、入門書が備えるべき美徳であることは自明だろう。入門書の役割は、専門的な内容を読者にとって身近なものとし、その内容を読者が自然に考えたくなるように読者を魅惑することだからである。そして、そのためにはさまざまな工夫が必要となる。文章を易しくするだけでなく、自然に読者を哲学的問題へと導くことや、個々の論点に関して納得を引き出す工夫が欠かすことができない。

『現代現象学』は、こうした点でも見事に成功している。全体として記述は平易であり、基礎的な概念の説明には常に豊富な具体例が与えられる[6]。また、方法論的に細かな論点への言及を減らし、より具体的な論点を中心に組み立てられていることも、読みやすさに大きく貢献している[7]。そして、展開される議論についても、直観的な例示によって理解や納得を引き出す工夫が試みられている。複数の共著者による著作がこうした美徳を一貫して備えていることは驚くべきことである。

以上で、三点に絞って本書の美徳ないし特徴を指摘してきた。もちろん、『現代現象学』が備える美徳が以上のものに尽きるとは主張しないが、少なくとも、同書が「まったく新たな試みを」、「既存の研究文献に適切に関係づけながら」、「平易かつ魅力的に描いた」著作であることは明確にできただろう。そして、このことだけでも、同書の画期性を示すには十分である。

３．『現代現象学』の議論を検討する

本節で私は『現代現象学』の内容に関する批判的検討を試みる。もちろんすでに述べたように、同書のすべての論点を扱うことはできない。また、選ばれている論点には、私自身の専門に基づく限界があることも間違いない（たとえば、現象学一般に関わる論点や、価値に関わる論点は取り上げられない）。とはいえ私が以下で扱う論点は、『現代現象学』の理解のために重要だと私が信じるものである。

6. ただし、現象学「以外の」用語についてはやや解説が不十分に感じるときがあったことは申し添えておく（たとえば、「真理条件的意味論」、「道徳的配慮」、「同一性条件／存続条件」、「固定的／歴史的依存」など）。

7. この方針についてはまえがきで宣言されている。

私がここで扱う論点は以下の四つである。それぞれについて、対応する章（ないし節）を明記しておこう。

A.　外在主義と内在主義について（第４章）
B.　身身二元論について（【3-3】、第５章）
C.　知覚において与えられるものについて（【1-1】,【8-1】,【9-2】）
D.　現代現象学の境界について（第７章、【9-1】）

A の論点（「外在主義と内在主義について」）は、これまで分析哲学において論じられてきた哲学的問題に、現代現象学がどのような回答を与えられるのか、ということに関わる。B の論点（「身身二元論について」）は、現象学と形而上学の関係についてのものである。この点は、現象学はしばしば非形而上学的な哲学と理解されることが多いように思われることから、現代現象学のあり方を理解する上で――現代形而上学者の私にとっては特に――気になる点である。C の論点（「知覚において現れるものについて」）は、現象学においてもっとも重要なタイプの経験である知覚に関わる。私はそこで、現象学における「知覚の不完全性」に関する疑問を提起する。最後に D の論点（「現代現象学の境界」）は、現代現象学を境界づける特徴は何かという問いに関わる。分析哲学を境界づける特徴が存在するという考えはほぼ放棄されているというのが現状であるが、この点は現代現象学も同じなのかという問いは、現代現象学を理解する上で興味深いものだろう。

３．１．外在主義と内在主義について

最初に検討するのは、第４章（富山豊氏執筆）で示される外在主義と内在主義に関する議論である。この議論は、分析哲学で論じられている問題に対して現代現象学の立場から答えることを試みるものであり、その点で分析哲学者にとって興味深いものである。その検討の準備として、まず簡単にそこでの議論の流れを確認しておこう。

第４章では、世界のあり方について何かを信じる／疑う／否認するといったタイプの経験（本書に倣い、以下ではこれらを総じて「思考」と呼ぶ）が論じられる[8]。思考がもつ本質的な特徴は、それが世界のあり方に「ついてのもの」であり――すなわち志向性をもち――、世界のあり方に応じて正しかったり間違っていたりすると

8. pp. 98–103. 以下では、文献名なしに頁数を指定したものはすべて『現代現象学』の頁数を表すものとする。

いうことである。別の言い方をすれば、思考は「意味内容」をもち、その内容は、世界のあり方に応じて真偽の観点から評価できる種類の「定立的な」経験である。

第４章の目的は、こうした思考が「意味内容」をもつということに現象学的な分析を与えることである[9]。たとえば、「この『現代現象学』の表紙は赤い」という思考は、特定の書物の表紙についてのものであり、また、その真偽を評価することが可能な内容をもつ。そのことを、私たちの経験に外在的な要素（たとえば、経験とは独立の世界との対応関係）に訴えずに、経験に内在的な仕方で説明することが、現象学的分析ということで意図されていることである。

そして、こうした現象学的分析を与える際に採用されるのが、現象学的に解釈された「検証主義的真理観」である[10]。検証主義的真理観によれば、ある思考が真であることは、それが証拠によって支持ないし正当化されるということに等しく、偽であるということは、それが証拠によって反証されるということに等しい。そして、現象学的な分析において、こうした証拠になるのは私たちがもつ経験（たとえば知覚経験）である。たとえば、「この『現代現象学』の表紙は赤い」という思考の場合、当該の本の表紙を知覚することは、その思考内容の正しさを支持するだろう。他方、思考内容と知覚経験が食い違う場合（見てみたら赤くなかった場合）には、その知覚経験はその思考内容が誤りであることを支持する。さらにここで、他のさまざまな思考に目を向けるならば、異なる思考は異なる経験によって支持ないし反証されることを見てとることができるだろう。この点に注目すると、思考内容そのものを次のように特徴づけることが可能になる。すなわち、ある思考の内容とは、その思考がどのような経験によって支持／反証されるかによって決まるものなのである。たとえば、「この『現代現象学』の表紙は赤い」という思考と、「この『現代形而上学』の表紙は青い」という思考の内容は異なるが、その違いは、それぞれの思考が異なる経験によって支持／反証されることによって説明できる。つまり、この立場は思考の内容を、当該個人の他の経験との証拠関係のネットワークによって――経験に内在的な仕方で――理解できるわけである。

さらに、この枠組は、思考の内容を「理解する」ということについても説明を与えられる[11]。この枠組によれば、私たちがある思考の内容を理解しているということは、それがどのような経験によって支持／反証されるかに関する手続きを理解している

9. pp. 107–114.

10. 検証主義的真理観の現代の主要な擁護者は（分析哲学者の）マイケル・ダメットであり、本章の記述にもその影響は色濃い。

11. pp. 115–122.

ことに等しい。このことによって、たとえば「宇宙には果てがある」といった、それ自体としては未だ真偽が明らかでない思考を私たちが理解できることも説明できる。

さて、ここまで第４章の議論を確認したわけだが、ここで導入されている枠組にとって、いわゆる意味論的外在主義の主張が問題になることはよく理解できる。なぜなら意味論的外在主義は、現在の文脈に合わせて言えば、「思考の内容は、個人の内的なあり方を超えた外在的要因によって決定される」という立場だからである。（他方で意味論的内在主義とは、「思考の内容は個人の内在的なあり方にのみによって決定される」という立場である。）したがって、思考内容を経験に内在的な観点から説明する立場にとって外在主義が問題になるのは自然であるのだが、問題は、第４章の議論が外在主義の挑戦にどう答えたことになるのかが不明瞭なことである。

その点を確認するために、いったん『現代現象学』から離れ、外在主義を擁護するためにヒラリー・パトナムが提示した「双子地球」の思考実験を確認することにしよう[12]。双子地球とは、私たちが今住んでいる地球のほぼ完全な複製であり、そこでは地球の住民の正確な複製たちが、地球上の対応する人物と同様の活動を行なっている（たとえば双子地球の私の対応者も、今この文章を同じように執筆している）。地球と双子地球の唯一の違いは、「水」と呼ばれている液体が地球では H_2O という分子構造をもつ物質でできているのに対して、双子地球で「水」と呼ばれる液体が、複雑な分子構造をもつ物質（「XYZ」と呼ばれる）でできていることのみである。ただし、H_2O と XYZ は、その表面的性質（色や沸点など）についてはまったく区別できない。

さて、ある地球人が双子地球に移動し、そこで「水」と呼ばれている液体の分子構造を学んだとする。このとき、この地球人が「地球人が用いる「水」という語は H_2O を意味するのに対して、双子地球人が用いる「水」は XYZ を意味する」と報告するのは正しいだろう。（これは、双子地球人が地球に来た場合も同様である。）つまり、双方で用いられる「水」の意味内容は異なっていると考えられる。この点を確認した上で、パトナムは、時間を巻き戻し、それぞれの液体の分子構造が判明しておらず、それを明らかにする方法がなかった時期（1750 年）のことを考えるように促す。1750 年から現代までの間に、地球ないし双子地球で「水」の意味に変化があったとは考え

12. Putnam (1975): 223–5. 『現代現象学』第４章では、内在主義的に扱うことが難しいタイプの思考として「このビルの裏側には公園があるはずだ」のような直示（「このビル」）を含む思考が論じられるが、これは外在主義が問題にしてきた典型例ではない。（内在主義者であってもこのタイプの思考の内容が外的要因によって決定されることを否定しないため、外在主義と内在主義の争点になる例ではない。）例の変更はわかりやすさのための措置だと思われるが、こうした変更によって外在主義の挑戦が不明瞭になっていることは否めない。

にくい。するとその時点でも、地球では「水」は H_2O を意味し、双子地球では「水」は XYZ を意味すると考えるべきだろう。すなわち、1750 年の時点でも「水は飲用に適している」という思考は、地球と双子地球では異なる内容をもつように思われる。

しかし問題は、こうした意味内容の違いを、第 4 章で示された枠組みがどのように説明できるのかがよくわからないことである。実際、1750 年時点での地球と双子地球の住民の経験に内在的な仕方で、こうした意味内容の違いを理解することは難しい。なぜなら、この時点では、地球と双子地球の住民にとって、その違いを与えるような経験（液体の分子構造を明らかにする経験）はまったく利用可能なものではないからである。むしろ、この場合の「水」の意味内容の違いは――外在主義がまさにそう考えるように――主体の経験のあり方を超えた世界のあり方（少なくとも、当時の人々の理解を超えた外在的な要素）によって決定されていると考えたくなる。

したがって、外在主義が第 4 章の枠組みに突きつける問題は、次のようにまとめられよう。「水」のような自然種名を含む思考は、異なる環境に応じて異なる意味内容をもつように思われる。しかし、こうした内容の違いを「経験に内在的」な仕方で理解することは難しい[13]。そして、問題をこのように特徴づけたとき、第 4 章の議論がいったいこの問題にどう答えているのかは明らかではない。一体どのような経験との結びつきによって、こうした内容の違いが説明可能なのかを読み取ることができないからである。

したがって、ここで私が提起したい疑問は、「第 4 章の枠組みがこうした外在主義が提起する問題にどのように答えられるのか」というものである。もちろん、現代現象学がこうした問いに答えられないと主張したいわけではない。また、パトナムの双子地球の議論についてもすでに多くの批判があり、その議論を否定するという選択肢さえ可能だろう[14]。しかしそれでも、課題そのものを正確に理解した上で、それに対してどのような回答を与えたのかは明確にされる必要があると考える。（入門書に完全な回答を期待するのは過大であることは承知しているが、少なくとも回答の方針については、より明快な解説を期待してよいはずである。）こうしたものが与えられなければ、現代現象学は外在主義と内在主義の対立を乗り越えられるという第 4

13. 第 4 章の枠組みを無理に当てはめるならば、実はこうした内容の違いは、1750 年に生きる人々には利用できない可能的経験（将来の化学の発展によって可能になる経験）との関係によって説明されると主張できるかもしれない。しかし、仮にこうした立場を採用する場合には、こうした人々の理解を超越した可能的経験による説明が、どのような意味で「経験に内在的な」説明になっているのかについて説明が必要だろう。

14. 典型的な批判については、たとえば Lau and Deutsch(2016): sect. 3 が参考になる。

章の結論を評価することは難しい。また、こうした要求に答えることは、現代現象学が分析哲学の真のライバルであるためにまさに必要とされることだと考えられる。

３．２．身身二元論について

次に検討するのは、第５章（植村玄輝氏執筆）で展開される「身身二元論」に関する議論である。とりわけ以下では、そこでの議論が「現象的自己」を何らかの実体的対象のように扱うことに対する疑問を述べるが、同時にその論点を現象学と形而上学の関係についての論点に結びつけることも試みたい。ここでもまた、簡単に第５章（と関連する【3-3】）の議論を確認することから始めよう。

まず【5-1】では現象学と形而上学の関係についての二つの捉え方が対比される[15]。すなわち、現象学を形而上学的問題に答えることを拒否する「非形而上学的な立場」とみなす見方と、現象学を形而上学的問題に答えることができるものとみなす見方である。そして後者は、経験と実在との一致という実在論的な考え方を基礎とする「現象学的な実在論」という立場と、その考えを基礎としない「現象学的な観念論」に区分される[16]。

続く【5-2】では、現代現象学の枠組みにおいて心身問題を解決しようとする試みが紹介される[17]。その際に現象学的なアプローチと対比されるのは、現代の分析哲学において比較的標準的な立場となっている「物理主義」ないし「物的一元論」の立場である。また、ここで確認しておきたいのは、同節において、心身問題はまさに形而上学的な問題であり、それに答えようとする現象学的な試みは「現象学を非形而上学的なものとはみなさない」立場を採用することになると論じられていることである[18]。この点は、後でまた立ち戻ることになる。

では、心身問題に対する現象学的なアプローチは、一般にどのようなものになるだろうか。まず確認されるのは、一人称的経験を基礎にする現象学にとって、それを（三人称的な）物的現象に還元する物的一元論は採用できないことである[19]。しかし他方で、現象学的に理解された心は、身体性を伴わない純粋に心的なものとみなすことができないとも論じられる。むしろ、私たちの心は「現象的な身体」を伴うものなのであり、現象学的に理解された心身問題においては、こうした「現象的身体」と「物

15. pp. 140–143.
16. pp. 143–152.
17. pp. 153–166.
18. pp. 156–157.
19. pp. 157–158.

質的身体」の関係性こそが問われなければならないのである[20]。これが、以下で「身身問題」と呼ばれる問題である。

続く議論では、身身問題については、現象的身体と物質的身体の同一視が難しいため、「身身二元論」と呼ばれる立場が有力であると論じられる[21]。そして最後に、この身身二元論の課題として、心身因果における因果の過剰決定の問題とよく似た問題が生じることが指摘されることになる。つまり、現象的身体がボールを投げるときには、同時に物質的身体がボールを投げていることになり、それぞれの因果関係がどのような関係にあるのかが問題になると論じられるのである[22]。

以上が第５章の議論の概略である。こうした議論が、現象学と形而上学の関係について非常に明確な見通しを与えてくれるものであることは間違いない。しかし他方で、「身身二元論」に関する議論については十分な理解が難しい点があった。私がそこで抱いた疑問は、ごく単純に言えば次のものである。すなわち、現象的身体を物質的身体と同様に、世界のうちに位置を占める物質的対象のように扱うべき理由は何なのだろうか。関連する【3-3】の議論を読むかぎり、私たちが現象的身体をもつとは、私たちの知覚が空間的身体を伴う主体の経験という側面をもつといったことであり、言い換えれば、知覚が特定の空間的構造を有するということである。しかし、その点を超えて、現象的身体を、物質的身体と同様に世界のうちに位置する物質的対象とみなすべきである理由は示されていない。他方で、身身二元論に関する先に紹介した議論は、一貫してそのことを前提としているように見える。そうであるからこそ、それぞれに成り立つ因果関係の間の関係が問題になるように思われるからである。したがってまず疑問なのは、こうした理解の根拠は何かということである[23]。

さらにこの疑問は、もう少し一般的な疑問に結びつけることができる。仮に、現象的身体を物質的身体と同種の対象と考える必要がないとしよう。このとき、現象学において心身（ないし身身）問題は、現象的身体と物質的身体の間の形而上学的関係を明らかにするという問題ではなくなるかもしれない。たとえば、その問題は、経験主体として把握される自己（現象的身体）の経験と、知覚を通じて現れる自己の物質的身体の経験の関係を、経験の枠内で明確化することでありうる。そして、こうした解釈のもとでは、心身問題は、もはや形而上学的問題ではなく、複数の経験の関係に関

20. この点は、特に【3-3】で論じられる点である。
21. pp. 159–160.
22. pp. 162–165.
23. 言い換えれば、現象的身体と物質的身体の関係を、Lowe(2008)のように、行為や経験の主体としての自己とその身体の関係と同一視することが正当なのかという疑問である。

する非形而上学的問題と論じることさえ可能かもしれない。すなわち、現象学には、心身問題を非形而上学的な問題として再解釈する道もありうるのではないだろうか。

もちろん、今述べた疑問は、現象学の知識に裏付けられていない単なる思弁であり、現象学が心身問題を非形而上学的問題として再解釈することにどれくらい見込みがあるかについては、私の判断は当てにならない。とはいえ、ここで私が問いたい疑問は、この点とは独立に述べることができる。すなわち、第５章で提示される「非形而上学的なもの」として現象学の理解は、やや狭いのではないかという疑問である。第５章では、非形而上学的なものとしての現象学は、形而上学的な問題に中立的であるか、あるいは形而上学的な問題をただ拒否するものとしてのみ理解されている。しかし、非形而上学的なものとしての現象学には、もうひとつの選択肢――すなわち、形而上学的な問題とされてきた問題を、非形而上学的な問題として再解釈する――という積極的な戦略がありうるのではないだろうか。実際、こうした戦略は、分析哲学における反形而上学的な立場においてもしばしば採用される立場であり、現象学においてもこうした戦略が排除される理由は特に見当たらないように思われる。

さて、以上で提起した第５章への疑問を簡単にまとめておこう。第一には、現象的身体を、物質的身体と同種の対象と理解する根拠は何かというものである。そして第二には、現象学において心身問題を非形而上学的な問題として理解することは可能ではないのか、あるいはより一般的には、現象学には、形而上学的問題を非形而上学的問題に再解釈して解決するという積極的戦略が可能ではないか、というものである。

３．３．知覚において現れるものについて

次に取り上げる論点は、知覚において現れるものに関わる。関連する『現代現象学』の節は【1-1】および【9-2】（吉川孝氏執筆）と【8-1】（八重樫徹氏執筆）であり、全体を通じて「知覚において現れるもの」の認識論的な身分についての疑問を提起したい。また、ここで提起する疑問は、「経験の不完全性」をどう理解するかという、本書を通じて繰り返し問題になる論点と深く関係している。

まず基本的な点から確認しよう。【1-1】において述べられるように、知覚において対象がさまざまな射影を通じて現れることは、現象学の基本的な洞察としてよく知られていることである[24]。たとえば、私たちがカップを見るときには、常にカップ

24. p. 8.

の特定の現れが与えられるが、そうした多様な射影を通じて同一のカップが統一性をもつものとして私たちに与えられているのである。

そして【8-1】では、知覚についてのこうした現象学的な理解を、他人の心の問題に応用する興味深い試みが提示されている[25]。一般に、私たちは直接他人の心を知覚することはできず、知覚できるのは他人のさまざまな身体的行動のみだと考えている。しかし、【8-1】で示されている考えによれば、私たちが他人のさまざまな行動（足をぶらぶらさせている／あくびをしている等々）を知覚するとき、同時に他人の心（退屈を感じていること）もまた私たちに知覚的に現れている。それはちょうど、私たちがカップの諸側面を知覚することを通して、カップそのものが私たちに現れていることと類比的である。

もちろん、このとき、他人の心の知覚に推測的な側面が含まれることは認められている。実際、足をぶらつかせていてあくびをしているのは、一緒にいる親の気を引こうとしていたからだということが後に判明することは十分にありうる。したがって、知覚を通して私たちに現れている他人の心が、一定の「不完全性」ないし可謬性をもつことは間違いない。しかしながら、【8-1】の議論においては、経験が一貫して進行しているかぎりでは、知覚において現れている他人の心のあり方を疑う余地は存在しないと論じられる[26]。つまり、知覚に現れるものの不完全性ないし可謬性は、私たちに知覚を通じて現れているものを疑う根拠にはならないことが明確に認められているのである。

しかし、『現代現象学』を読み進めると、別の節では、これとは異なる理解が示されていることに気づかされる。その典型は【9-2】である。そこでは、知覚が一定の推測を含み、誤りの可能性に開かれていることは、むしろ知覚によって実在のあり方を知ることを疑わせる根拠になりうると述べられている[27]。もちろんその直後には、知覚に対する極端な懐疑に対抗する立場が論じられているため[28]、実際の記述はより微妙なものなのだが、しかし、経験が一貫して進行しているかぎり知覚において現れるものは懐疑の対象にはならないという【8-1】の議論とは異なる理解が示されていることは間違いない。なぜなら、もし【8-1】の議論が正しいならば、そもそも知覚に対する極端な懐疑は成立しないと論じるだけでよいはずだからである[29]。

25. pp. 230–243.
26. pp. 234–236.
27. pp. 282–283.
28. pp. 284–286.
29. 【5-1】の最後でも知覚の不完全性が論じられるが、ここで論じられている不完全性は、知覚が可謬的であることによる不完全性であるというよりは、知覚が特定の観点からのものであることによって生じる不完全性である。

以上のことから生じる疑問は、知覚の不完全性とは正確にどのようなものであり、それがどのような含意をもつのかというものである。実際、知覚の不完全性が単に可謬的であることを意味するならば、【8-1】で論じられているように、こうした知覚を極端に疑うことには、それほど根拠があるようには思われない。しかし、もちろん知覚の不完全性には、こうした懐疑を動機づける側面があるのかもしれない。こうした点をより明示的に説明することは、知覚が現象学において果たす重要な役割を考慮するならば、現代現象学にとって重要な課題であるように思われる。

３．４．現代現象学の境界について

最後に扱う論点は現代現象学の境界に関係する。関係する節は、音楽作品の存在論や、美的経験と美的判断を論じた第７章（森功次氏執筆）と、人生の意味を論じた【9-1】（八重樫徹氏執筆）である。

ここでの疑問は、ごく簡単に述べることができる。第７章と【9-1】のいずれも、扱われている哲学的問題の解説として明快な内容をもつが、他方で（一部の注やコラムを除けば）分析哲学の入門書にほとんどそのまま転載しても違和感のないものである。すると、これらの章や節がいったいどのような意味で現代現象学という分野に属するといえるのかという疑問が生じざるをえない。実際、それぞれの議論を見るかぎり、哲学的な問題を論じるにあたって、現象学の知見や方法を積極的に用いているとは言えない。もちろん共通点として、何らかの形で私たちの経験に関わる論点を論じていることを挙げることはできるかもしれないが、しかしその程度でよいならば、ほとんどの分析哲学の業績も現代現象学に含まれると考えなければならなくなるだろう。したがって、これらの章や節で展開される内容が、どのような意味で現代現象学に属するのかはよくわからないのである。さらに、ここでの疑問はより一般的な仕方で問うこともできよう。現代現象学とそれ以外の哲学分野は何によって境界づけられるのだろうか。ある研究が現代現象学の一部だと言えるためにもつべき特徴は何なのだろうか。

もちろん、こうした問いに対して、現代現象学とそれ以外（例えば分析哲学）を境界づける特徴などなく、現代現象学には、「何らかの意味で経験に関わる哲学的問題を論じる分野」といったまとまりしかないと論じることは可能である。そして、実際にこれは、分析哲学が選んだ道でもある。分析哲学は、扱う話題や方法論の拡散の結果として、はっきりした輪郭を失っており、分析哲学とそれ以外を区別する特徴を見つける試みはほぼ放棄されている。すると、現代現象学がこれと同じ道を選ぶことも可能だと考えられるかもしれない。

しかし他方で、現代現象学には、分析哲学よりも明確な輪郭が必要なのではないかと思われることも確かである。なぜなら、現代現象学が生まれたばかりの分野であり、生まれたばかりの分野にとって、他分野との差異を明確にすることは重要な課題だと思われるからである。そうした差異がなければ、そもそも当該の分野を立ち上げることがなぜ必要なのか、その分野で仕事をするということが何をすることなのかが不明瞭になるだろう。すると、現代現象学に対しては、その分野の境界について、より明確な理解を示すことを要求するべきであるようにも思われる。

いずれにせよ、現代現象学の境界についての疑問は、現代現象学とはいかなる分野なのかを理解する上で間違いなく重要である。さらに、この疑問に対する回答は、『現代現象学』の共著者の間で異なるかもしれず、それはそのまま共著者それぞれの現象学観を表すものとなりうる。その意味でも、この問いに対する回答がどのようなものになるかは、興味深いところである。

４．おわりに

私はここまで、現代哲学の入門書の執筆者と、分析哲学の研究者という二つの観点から『現代形而上学』を検討することを試みてきた。本書は間違いなく画期的な書物であり、今後も哲学分野において広く読みつがれていくことは間違いないだろう。本稿の検討や疑問の提起が、同書の理解に資することができたならば幸いである。

参照文献

Lau, J. and M. Deutsch (2016) "Externalism About Mental Content," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition), E. N. Zalta (ed.), URL = <https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/content-externalism/>.

Low, E. J. (2008) Personal Agency: The Metaphysics of Mind and Action, Oxford: Oxford University Press.

Putnam, H. (1975) “The Meaning of Meaning,” reprinted in his *Philosophical Papers, Vol. II: Mind, Language, and Reality*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 215–271.

鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛、『ワードマップ 現代形而上学：分析哲学が問う人・因果・存在の謎』、新曜社、2014 年。

植村玄輝・八重樫徹・吉川孝編著、富山豊・森功次著、『ワードマップ 現代現象学：経験から始める哲学入門』、新曜社、2017 年。